

信綱は「戦争前入会された若人で、自分の子のやうに親しく思つて、自分の才能を惜しんでいます。雪子夫人も同様で、竹柏会機関誌『心の花』に何度か戦地の栄三を案じた文章や戦死を知つた時の悲しみを綴っています。栄三と共に信綱秘書であつた坂田富美も同誌に弔歌を寄せおり、栄三の信望が厚かつたことがわかります。

■ 富美叔母について



左から、牧、邑、富美、武雄。後ろの屏風が橋守部書。

富美叔母（長女）は明治三十五年東京で生まれ、大正十三年に日本女子大学国文科を卒業し、まもなく信綱先生の秘書・門人となりました。私が小学生の頃、新潟在住の父眞（四男）は夏になると時折、富美・牧（次女）叔母を説いて、群馬県水上温泉、また近くの間瀬海岸に泊まりに行きました。父たちが夜の更けるのも忘れ、久留米や水分村の家の前を流れる小川での鮎捕りや舟遊び、螢狩り、蜜柑のなる山のことなど、豊かな自然の中で遊んだ子供の頃の頃です。

特別展「信綱と坂田富美」を開催して頂きました。誠に有難うございました。

信綱先生の学者・歌人としての幅広いご研究、優しいお人柄や素晴らしい人脈等を知る事ができ、また、私どもにとりまして富美叔母を改めて認識する機会を与えて頂きました事を、深く感謝申し上げます。叔母もさぞかし喜んでいる事でしょう。

■ 富美叔母について

佐佐木信綱記念館だより	
坂田 育	第二十五号
発行 鈴鹿市教育委員会	市
連絡先 佐佐木信綱記念館	
鈴鹿市石葉師町	
1707-3	
TEL059-374-3140	

目 次	
寄稿 「叔母富美を語る」 坂田 育
記念館ニュース(平成二十二年度特別展報告ほか)	磯上知里
「宇野栄三資料の紹介」 信綱一首(二十五)	2, 3
展示室だより 磯上知里 「雑考	4
どうする、異変」 片岡 正	4

■ 家族、育つた環境について	
富美叔母の父坂田伝蔵は、久留米藩士猪十郎の長男として安政三年に生まれ、漢学を後藤東庵に、英語を宮本洋学校でジョージオーランから学びました。明治二十六年に山形県給のために土日になると神奈川大船町の富美・牧叔母、また武雄（長男）伯父宅へ通いました。	その後、伯父夫妻を囲み、横浜中華街で家族揃つての食事会がありましたが、富美叔母は何時も皆の話を笑顔で聞くだけがありました。
その後、伯父夫妻を囲み、横浜中華街で家族揃つての食事会がありましたが、富美叔母は何時も皆の話を笑顔で聞くだけがありました。	母邑は久留米藩士早川重高が江戸在住の時に東京で生まれ、妹糸世と共に桂園派の歌を学びました。弟秀三郎は久留米明善校に学び、同級生の画家青木繁は時折早川家に遊びに来ておった様です。繁二十七歳の時に描いた宿命の絵と言われる「秋声」のモデルは糸世であります。
富美叔母の妹牧はフエリス女学院に学び病弱でしたが八十五歳、叔母も九十三歳迄と共に長生きであります。富美叔母は、幼少時に父伝蔵から一冊のノートを与えられ、小倉百人	間島愛、朝吹磯子、徳富静子、松浦睦子、伊藤嘉夫、穴山孝道、林大、安田勝子等からの手紙の他、正田きぬ、三井美尾子、藤岡保子等の歌集を通して温かいお心遣いを頂き、兄弟にも話せなかつた悩み、寂しさを打ち明けられる人達と巡り合えて本当に幸せな一生であつたと思います。

■ 交流について	
浦睦子、伊藤嘉夫、穴山孝道、林大、安田勝子等からの手紙の他、正田きぬ、三井美尾子、藤岡保子等の歌集	無口な富美叔母にとつて、戦中戦後の混乱の時代に信綱先生の秘書として温かいお心遣いを頂き、兄弟にも話せなかつた悩み、寂しさを打ち明けられる人達と巡り合えて本当に幸せな一生であつたと思います。
（薰）に師事し、草仮名の研究もし	
ておりました。	

■ 交流について	
浦睦子、伊藤嘉夫、穴山孝道、林大、安田勝子等からの手紙の他、正田きぬ、三井美尾子、藤岡保子等の歌集	無口な富美叔母にとつて、戦中戦後の混乱の時代に信綱先生の秘書と
して温かいお心遣いを頂き、兄弟にも話せなかつた悩み、寂しさを打ち明けられる人達と巡り合えて本当に幸せな一生であつたと思います。	を通じての幅広い人脈と親密な交流があつた事が伺われます。
（薰）に師事し、草仮名の研究もし	
ておりました。	

で、箸をパターンと落とされた音が電話口から聞こえたそうです。

信綱は「戦争前入会された若人で、自分の子のやうに親しく思つて、自分の才能を惜しんでいます。雪子夫人も同様で、竹柏会機関誌『心の花』に何度か戦地の栄三を案じた文章や戦死を知つた時の悲しみを綴っています。栄三と共に信綱秘書であつた坂田富美も同誌に弔歌を寄せおり、栄三の信望が厚かつたことがわかります。

「栄三調べ書」以外に西村様からは、栄三肖像写真と栄三自筆と思われる朱の書き込みが入つた『西鶴名作集』（藤井乙男 大日本雄弁会講談社 昭和十年）のご寄贈も賜りました。戦後、西村様のお姉様が他嫁がれる時に、預け置かれた栄三ゆかりの品です。

このたびは、西村様をはじめ長谷川ご住職様、関係者の皆さまの並々ならぬご熱意とご尽力のお蔭で、栄三没後約七十年を経て、今後の顕彰につながる事柄が見つけ出されました。深謝申し上げます。

歌集『豊旗雲』（実業之日本社 昭和四年）上つ代のほひ恋しみさ丹塗の大きまろ柱に手を触りて見つ①法隆寺

昭和三年四月四日、信綱は天平文化記念（同年は天平元年から千二百五十年）会総裁の梨本宮殿下らと共に、法隆寺を訪れました。そして、往時を懐古しながら、信綱が詠んだ一首を、この一首は、信綱自筆掛軸で紹介しています。

また、信綱は夢殿にて秘仏を拝観し、その感慨を歌謡『夢殿』（歌謡集『おもかげ』岩谷書店 昭和二十二年）にあらわしております。この一首は、信綱自筆掛軸で紹介しています。

信綱歌碑拓本とあわせ、歌碑除幕式記念として五十二名（参列者一部）が署名した『凌寒帖』も展示しています。

このほか、親交の一端がうかがえ

る信綱宛の凝胤管主の手紙等も展示

しています。

信綱歌碑拓本とあわせ、歌碑除幕式記念として五十二名（参列者一部）が署名した『凌寒帖』も展示しています。

このほか、親交の一端がうかがえ

る信綱宛の凝胤管主の手紙等も展示

